

英國における會社企業の生成とその法規整

星 川 長 七

第一 初期的經濟團體としての Merchant Guild

- (一) アングロ・サクソン時代のギルド
- (二) 商人ギルドの發生
- (三) 商人ギルドの構成とその機關

第二 中世期における經濟團體としての Craft Guild

- (一) クラフト・ギルドの結成
- (二) クラフト・ギルドと商人ギルドとの相異
- (三) クラフト・ギルドと商人ギルドの關係
- (四) クラフト・ギルドの構成とその機關
- (五) クラフト・ギルドの活動

第三 ギルド制度の變容と Company of Merchants 及び London Livery Companies

- (一) ギルド制度の衰退・變容
- (二) Company of Merchants
- (三) London Livery Companies

第四 産業ギルドの Trading Companies への展開

英國における會社企業の生成とその法規整

第一 初期的經濟團體としての Merchant Guild (Gild Merchant)

(一) アングロ・サクソン時代のギルド

イギリスにおいてギルドに關する歴史は、經濟學者が人間の經濟的活動に關する歴史を研究しようとするとき、法學者が薄暗いヴェールに覆われた會社に關する法の淵源を探究しようとするとき、さらに社會學者や史學者が、古い社會の構造とその統治組織に興味をもつてこれを研究しようとするとき、ひとしく關心のよせられる事柄である（註一）。

われわれもイギリスにおける會社企業が何時頃から如何にして發生し、それが如何に法規整されて現在にいたつたかを考究するにあたつて、經濟活動をその主要な目的として生れた中世的協同團體の一つとしての商人ギルド (gild merchant or merchant gild) に、その具體的な出發點を求めなければならない。

イギリスにはアングロ・サクソン時代に、既にギルドと呼ばれるものが存在していた（註二）。このギルドが會社企業の胚種 (germ) となつたと言われる商人ギルドと如何なる關係に立つか。しばしば誤つてこの兩者が混同されあるいは同一視されるので、アングロ・サクソン時代のギルドについて若干の考察を加えておかなければならない。

英國史をひもといた者は誰でも知つてゐるように、アングロ・サクソン民族の社會も、他の多くの民族の最初の社會に見られるように、家族的結合すなわち血族的結合 (maegeth) が、社會の構成單位であつた。しかし、アングロ・サクソン民族の場合は、他の民族よりも比較的早くこの段階を通過し、七・八世紀頃のおぼろげながら知られるこの

民族の社會は、こうした原始的社會とは、かなり違ったものになつていた。このことは當時の社會がある程度の生産力をもち血族的結合から地域的結合に移りうる素地をもつていたことを物語るものである。もつともその痕跡は若干存在していた。そして既に國家というものが存在し、その活動が活潑になつていた。かつてちいさな町であつたのも市 (borough) と呼ばれるものにもまで發展し、ここでは國王の代表者である州長老 (royal calderman) の力が州 (shire) や村落 (hundred) にまで滲透し、非常に有力なものになつていた。その間に二つの新しい社會的要素が出現した。すなわち領主とギルドである。多くの自由民 (freeman) は、領主と呼ばれる土地所有者の家臣または從屬者となつた。しかし、當時の國家はさまで強固なものでなかつたため、その政治力も警察力も弱く、人民の保護について充分な力をもつていなかつた。かような社會的環境にあつて人々は、互に協同し助け合うために團結し合わなければならなかつたことは、けだし自然の勢であつたと考えられる。グロスのかような相互扶助 (mutual support) のために結成された任意團體がギルドであると言つてゐる (註三)。また、デーヴィスによれば相互依存 (mutual interdependence) と親近感 (close affection) とが友愛感情 (fraternal feeling) が主要な特徴となつてゐる團體、若くは人々が相互援助を必要と感じたとき自ら作りあげた團體がギルドというものであるとしてゐる (註四)。

アングロ・サクソン時代にギルドが結成されなければならなかつた理由の一つにディーン人の侵入があつた。ディーン人は當時なお異教を信ずる蠻族で、掠奪の際に非常に殘酷な行爲をした。寺院を焼き、市民を殺し、子供を奴隸に賣り、婦女を凌辱した。これらの蠻行を血族的な小さな集團の力では防ぎ得なかつたために、ギルドを結成しなければならなかつたのである (註五)。また當時普及してゐたキリスト教が友愛精神を説いて、宗教的に人々を團結せ

しめたこともギルド結成にあづかつて力があつた。

要するに、ギルドというものは中世期における團體的傾向とキリスト教の融合によつて生れたものであることは事實である。

かようにギルドは相互扶助と友愛感情を基盤とする人間の結合體であるが、各個のギルドについて言えばそれ／＼具體的な目的をもつていたので、その觀點からギルドを分類すれば、次のようになる（註六）。

1 聖職ギルド (ecclesiastical gild)

このギルドはその構成員の全員または大部分が僧侶 (clergy) から成り、専ら禮拜や祈禱を行うことを目的とするものである。

2 社交・宗教ギルド (social-religious gild)

このギルドは主として宗教的行事や善行をなすために結成されたものであるが、そのほか生命および財産の保護をも目的とした。

3 産業ギルド (trade gilds)

このギルドは廣く産業に従事する人々によつて結成されたものであるが、後に詳述する商人ギルド (merchant gild or gild merchant) とクラフト・ギルド (craft gild) にわかれる（註七）。

(二) 商人ギルド (Merchant Gild or Gild Merchant) の發生

前述のように、治安維持のため、社交仲間 (social fellowship) の育成のため、あるいは宗教上の禮拜を共に行うための、また構成員の共通の利益を擁護することを目的とするギルドの結成は、中世社會に見られる普遍的な現象であつたが、純粹に經濟目的のために結成されたギルドすなわち商人ギルド (merchant gild or gild merchant) の出現したのはノルマン征服以後のことである (註八)。それ以前においても manor 村落の内外において、極めて小規模な商取引が行われ、商人と呼ばれるものが存在していたが、目立つほどの存在ではなかつた。

ノルマン征服以後ウィリアム征服王が、その強大な權力によつてアングロ・サクソン諸侯の封建的な騷亂 (feudal turbulence) を鎮めた後は、國內の平和が保たれるようになり、イングランドの商人の生命や財産が安全なものとなつた。サクソンの年代記編者は、このことを次のように述べている。すなわち『ウィリアム征服王がこの地にもたらした平和は忘れられてはならない。それは人間が……ふところを金貨でいつぱいにして害を受けることなく國內を通つて行くことができるようなものであつた』と (註九)。またアシュレーはイングランドに『嘗つて享樂したことのない國家的平和と秩序がもたらされ、一時的に退歩した文化が充分につぐなわれた』と言つている (註一〇)。國內に平和がもたらされ治安が維持されるようになると、大陸から多くの商人が渡來しイングランドの商業の發展に大きな刺激を與えた。そしてロンドンや他の主要都市の中にフランス風の名前がいたるところに見受けられるようになった。かくてイギリスが北歐的な孤立の状態から脱し、精神的にも物質的にも南歐との結びつきが生れた。この時代の都市の住民は、未だ農業や牧畜を捨てていなかったとは言へ、賣るべき商品すなわち都市内でつくられたパン・肉類・魚類等の食物をはじめ、織物・皮革・木工製品・皮製品・金屬製品などをもつていた。貨幣も一般人に交換の媒

介物として使用されており、市 (Fair) においてそれらの商品が賣買された。市は年に一回開かれるものから、一週に一回開かれるものまでいろいろあつた。この市には多くの人が集り、そこに小屋が作られた。市を開く權利は領主に屬していたが、原則として國王が特許狀 (charter) を與えて、城や寺院のある町にこれを許可した。

商取引の増大するにつれて、商業的要素が都市生活の有力な要素となり、間もなくもろもろの侵害 (encroachment) に對し、その發生期の繁榮を守ろうとする協同行爲の必要が感じられるようになった。いまや商業や工業が農業を凌駕し商人は保護さるべき共同の利益のために結合すべき段階に達した。かくて商人のみによつて結成された經濟的組織すなわち商人ギルドが誕生するにいたつたのである。

商人ギルドがそれ以前に存在していたギルドを改造したものに過ぎなかつたか、或はノルマンディーから直接移入された新しい制度であつたか否かを、確實に立證することは困難であるが、グロスは、ノルマン征服の時代に既に北フランスやフランドルに商人ギルドが存在していたことから、征服後大陸から渡來してイギリスの諸都市の市民となつたフランス人や、イングランドの市場へ押かけたノルマンの商人が、秩序ある取引組織の有利なことを教えたためにイギリス人もこれを結成したのであると言つている（註一一）。これに對しデーヴィスはグロスの見解を立證する證據が存在しないこと、外國人の影響の最も強かつたロンドンに商人ギルドが存在せず、かえつて小さな遠隔の地に商人ギルドが存在したことおよびノルマンの支配階級がこの制度の移植を促したと思われぬ等々の點をあげて、この説を反駁している。そしてデーヴィスは大陸において商人ギルドが盛んであつたとしても、その事實から直に移植を承認することは早計で、むしろその發生は、本質的には、ノルマン人の征服によつてイングランドに生じた

新たな事態から生れたものと見るべきである。

要するに、イングランドにおける商人ギルドの起源は、新たな商業生活の發展と、國家や教會や世俗社會の地域グループにおける相互責任と相互利益という既存の社會活動において既に經驗によつて得られたものが、新たな事態に適用されたものであり、これに加えてその地方地方の社會機構の特質に適應するように變容されたものであらうとしている（註一二）。

商人ギルドに關する初期の明瞭な出典は、Manorの領主である貴族または大司教によつて與えられた特許狀や文書に見出される。すなわちそれは、ロバート・フィッツハモン（Robert Fitz-Hamon）がバアフォード（Burford）の市民に與えた特許狀（charter）とアンセルム（Anselm）がカンタベリーの大司教であつた時代に作成された文書の中に見出される。その後ヘンリー一世の治世に、商人ギルドに關する事項が、各種の自治體の特許狀中に現われ、さらにヘンリー二世、リチャード一世によつて、都市の自治權を認める特許狀中に、商人ギルドを認めるものが次第に増加し、エドワード一世の時代には議會に代表を送りうる都市一六六中、九二は商人ギルドをもつていたと言われる。一二〇〇年にイプスウィッチに對しジョン王が與えた特許狀は、商人ギルドを認める形式としては、最も普遍的なものの一つであるが、それは次のような内容のものであつた。すなわち、

『天帝の恩寵によりジョン王。

もろもろの附屬物、もろもろの特權および自由な慣行をもつイプスウィッチ自治邑を、朕がイプスウィッチ市およびその相續人に世襲的に保持さるべきことを朕および朕の後繼者が承認すべきこと、ならびにイプスウィッチ市長の

手により、毎年ミケルマス祭の日に、朕が財務府に對し、正當なる慣例に従う上納金および慣例上支拂わるべき一〇〇シリングの利益の支拂をなすことを同市民に許可し、且つこの特許狀においてこれを確認したことを汝等知れ。

朕はイプスウィッチのすべての市民が、通行税ならびに市場税、積荷税、航行税、河川税およびわが國土のすべてを通じて、また朕が海港においてその他のすべての關稅の免除を受けることを許可せり。朕また市民に次の事項を許可せり。役人を除く市民は何人と雖も、外國保有地に關する以外の如何なる訴訟にても、イプスウィッチ市外において訴答を提出することを得ず。市民はギルド・マーチャントおよびハンスを結成することを得。何人もイプスウィッチ内に宿泊し、または強制的に財物を取得することを得ず。市民は適法に土地および動産質を有することを得。また、そのすべての金錢債務の支拂を何人よりも受くることを得。市内にある市民の土地および保有財産に關しては、イプスウィッチ市および朕が自由自治邑の、古來の慣習に従いて裁判の爲さるることを要す。イプスウィッチにて契約せられた金錢債務およびこの地において得られたる動産質に關する訴訟は、イプスウィッチで行わたることを要す。市民は何人と雖も朕が自由自治邑の法によるときのほか、罰金を支拂うべき判決を受くることなし。

朕また朕が國土のすべてにおいて、人がイプスウィッチの者より通行税および市場税またはその他の關稅を取ることを禁ず。これに違反したるときは一〇ポンドの罰金刑に處す。故に上記市民は適法且つ平穩に上記特權および關稅の免除を、一切の點において、ロンドン市民の特權および關稅の免除をのぞき、イングランドの他の自由自治邑の市民が、既に有し、また現に有するが如く、自由且つ完全に有し且つ保持しうることを、朕希いこれを嚴命す。さらに朕は次のことを希い且つこれを許可す。上記市民は合法にして思慮ある者の中より二人の者を選任し、朕が財務府の

長に拜謁せしむることを得。これらの者は上記イブスウィッチ市の市長職を適切且つ誠實に保持すべし。これらの者は執行官管轄地にて、適當に行動する限り解任せらるゝことなし。但し、上記市民の共同の勸告ある場合はこの限りにあらず。朕また次のことを希う。同上の市においては上記市民の共同の勸告により、合法にして思慮ある者のうち、刑事訴訟および同上の市において、國王に關するその他の事項を履行し、且つ同市々長が正當且つ合法に貧者をも富者と均しく遇するよう取計うべき者四人を選任することを得。朕が治世第二年五月二五日、ウエルスWalesの副僧正 G : : の手を経てこれを與う』と（註一三）。

かように商人ギルドに關する特許狀は、都市に對する特許狀の中に包含されていたが、何故にノルマン王家が都市に對して特許狀を與えたかを知ることが、都市と商人ギルドの關係を理解する上において必要なので、一應考察しておかなければならない。

ノルマン王家は征服者として外國からイングランドに入り、アングロ・サクソン民族に君臨した。そしてノルマン人の貴族がノルマンディー公と共に移つて來て、この國の支配階級となり、王家はこの支配階級の代表者であつた。しかし、王家はイングランド王という特殊な立場からその王家の基礎を固めるために、他の一般の封建諸侯とは異つた態度をとる必要があつた。すなわち單に封建的支配者として君臨し搾取をことゝしては、アングロ・サクソン民族を心服せしめることが困難であつたのである。また、軍事上からもノルマン人の武士のみを背景としては兵力が不充分で、アングロ・サクソン人をも徴收することが必要であつた。このことは既にウィリアム征服王の時から實行され、當時は各町に一定數の兵士を出すことを命じていた。殊に王家はウィリアム二世の時代にもヘンリー二世の時代

にもノルマンディー公のロベールと争つており、しかもイングランドに移住して來たノルマン人の中に、このロベールに味方した者があつたため、是非ともアングロ・サクソンの人民の側から、軍事的その他の援助を受ける必要があつたのである。そこで王家はアングロ・サクソン系民族と結託する必要を感じ、そのための政策として採られたのが特許狀を與えることであつた(註一四)。

さて、特許狀に使用されている商人ギルドに關する文言は、前掲のイプスウィッチに與えられた特許狀によつても知られるように、非常に簡單であるが、これを敷衍すれば次のようになる。すなわち『國王は特許狀の文言によつて賦與した商業上の特權 (mercantile immunities) を、最も有利に用いるために、團體を形成し保持する權利を市民 (burghes) に與える。彼らは租税を免除 (toll-free) されなければならない。また彼らはこの特權を維持するために、團體を結成することができる』(註一五) ということなのである。

(三) 商人ギルドの構成とその機關

商人によつてひとたびギルドが結成されると、ギルドはそれ自身の役員を選任し、自ら金庫 (treasury) を保持し、自ら總會を開き、自らの規約 (ordinance) を可決し、それを文書にして保存した。イプスウィッチにおいては、一人の長老 (alderman) が統轄し、steward または warden と呼ばれる二人または四人の理事 (associates) がこれを補佐した。しかし、ある都市ではその地位は一人または二人の steward, master, warden または keeper によつて占められていた。通常 door-keepers, treasurers, clerk および marshals のような、あまり重要でない幾人かの役員

もいた。役員は毎年ギルドの構成員によつて選任された。長老その他の主要な役員の義務は、一般にそのギルドの審議を統轄し、その規約を實施し、その財産を管理し、罰金 (fines)、加入金 (entrance fees)、賦課金 (assessments)、使用料 (hire)、商業を獨占することによつて生じた利益およびその他の收入を徴收し、ギルドの構成員の争を解決することであつた (註一六)。

ギルドの總會は、年一回か年二回または年四回であり “*mornhespeches*” (or morning speech) と呼ばれ、こゝで構成員の加入が認められ、規約が作られた。ギルドの構成員たる地位は會員 (*brethren*) による選任および加入金 (通常は既存會員の親族の場合には比較的低い) の支拂によつて取得された。新たに選任された構成員は、團體に對する忠實を宣誓し、その規約を遵守し、特權を維持し、商議の祕密を嚴守すると同時に役員に服従し、新たに取得した特權を利用して、非ギルド員を援助しないことを誓約しなければならなかつた。そして、この新たな義務を履行するための保證人 (*sureties*) を必要とするという要件が、時として慎重に補足された (註一七)。

商人ギルドの構成員は商業に従事する都市の住民のすべてを含んでいたように思われるが、ギルドの構成員は必ずしも市民と同一ではなかつた。都市の外側に住んでいる者でギルドに加入を認められている者もあり、また都市の住民でギルドに加入していない者もいた。しかし、市民はギルドの構成員となる資格はあつた。但し正式には會員 (*brother-hood*) によつて加入が認められなければならなかつたことは、前述の通りである。

以上の如き組織をもつ商人ギルドが如何なる活動をしたかと言うに、それはギルド構成員のために商業の獨占を維持することであつた。この目的を達成する必要から多くの法規を制定した。彼らはこの特權を享受するために代償を

支拂つていたので、慎重にこれを確保した。この權利の排他的行使に關する文書が、ギルドの文書の中でも注目さるべきものである(註一八)。都市の商人ギルドに屬さないものは、ギルドの法規に従わなければ、その都市において取引することを得なかつた。ギルドの法規によつて、非ギルド員には市場税(*olls*)が課せられたが、ギルドの構成員はその全部または一部を免除されていた。また、非ギルド員は店舗を構えることも、特定の商品を小賣し、あるいは指定量以下で賣ることもできなかつた。もつとも一般に使われる食料品は大抵の種類のものが、この統制から除外されていた。さらに、非ギルド員の商取引は、一般に市(*fairs*)の間、時としては定期市(*market day*)の間は停止された。またギルド構成員以外の買占者(*regater or engrosser*)すなわち轉賣の目的をもつて商品を購入した者は、小賣りで多くの商品を賣つてはならなかつたし、他の者もギルド員あるいは市民以外の者から物品を購入することができなかつた。非ギルド員は互に取引することも禁じられていた。賣るべき商品も *common hall* か市場(*market-place*)で賣らねばならず、その取引は特定時間内になされなければならなかつた。多くの商品は外來者(*foreigners*)すなわち *non-townsmen* には全く賣ることができなかつた。外來の商人(*stranger merchant*)は四〇日以上町(*town*)に滞在することができず、滞在期間中に取引しようとするときは、ギルド構成員の面前で取引をしなければならなかつた。外國人(*aliens*)は自己の商品の賣却をギルド構成員の名義を假裝してなすことができず、ギルド構成員と *partnership* 契約を締結することもできなかつた。

ギルド構成員は外國人に對しても、ギルドに所屬しない *towns-man* に對しても、賣りに出された商品の先買權(*right of pre-emption*)を有し、さらに港に運ばれた積荷に對しても亦最初の申込をする權利を有した。しかし、

先買權を行使したギルド構成員は、自己の購入した物品について、若し請求されれば、仲間のギルド構成員に分配しなければならなかつた（註一九）。

ある都市においては、若干の商品 (commodities) について特別の規制がなされた。たとえば、魚商 (fishdealer) はそのギルドの許可なくして、魚を賣るために切つてはならないとか、townsman が賣るための魚をもっている限り、商取引をする許可を得られなかつた。外國人は市場が立つてゐる日の三時前に穀物を持つて行くと沒收された。また、リーディングでは市の日以外に彼らが鞆皮を取引することを禁じられていた（註二〇）。

以上のように、ギルドの活動の主眼は、その特權を維持するために制定した法規を、構成員ならびに構成員以外のすべての者に遵守せしめることにあつたのであるが、そのために行動が極めて排他的になつたとしても、それは特定の社會の中における經濟を外來者、特に外國人との經濟的競争から守らんとする意圖のもとに行われたもので、交換經濟の發達しはじめた當時の社會における一團體の經濟的利益を確保するためには、止むを得ないものであつたろう。ともあれ、ギルドはその特權の疵護によつて、着々富力を増して行つたのである。われわれはイギリスにおける現在の會社企業の系譜をさかのぼつて、それがこの商人ギルドという經濟組織に、遠き祖先をもつことを知つたのであるが、これが後に如何に發展し、そして變容しつつ現在にいたつたかを知るために、さらに、考究の眼を前方に向けなければならぬ。

註一 Gross, The Gild Merchant, 1890, vol.1, p.1.

註二 Levy, Private Corporations and Their Control, 1950, vol.1, p.13.

註三 Gross, op. cit., vol.1, p.175.

註四 Davis, Corporations, Their Origin and Development, 1905, vol.1, p.134.

ギルドの起源については學説がわかれてゐる。Wilde はゲルマン民族の郷黨共同酒宴制度 (Convivia) にその起源を求め、ギルドは血族間における結婚・出産・死亡の際における會合であつて、この席に列する團體がギルドと呼ばれ、さらに共同行爲のために會合する團體、すなわち血族的結合から地域的結合に轉じたものがギルドであるとする。ブレンターノはイギリスにおけるギルドの起源を古代の家族制度に求め、古代家族が相互扶助の盛な眞の同胞から成立すると同様に、エクゼターやケンブリッジにおけるギルドの規約を見ると、その本質は相互扶助を目的とする兄弟的團體であつたことが知られると。そして當時のキリスト教がこの共同行爲遂行のための團結を強め、ギルドを普及せしめた。まずキリスト教が宗教的團體と共に北歐にひろがつたとき、この團結は異教徒的饗宴に結合して、religious guild が生れ、家族的紐帶がゆるみ家族の相互扶助が行われなくなり、且つ國家もこれを保護し得るほどの力をもたなかつたとき、家族的結合を模倣した人爲的結合が生れた。これがギルドである。しかし、これらの學説に對してグロス¹⁾は次のように批判している。古代ゲルマン民族の異教徒的饗宴は、同胞的連帶責任の精神もなく、また、それは單なる一時的會合に過ぎないものであるからギルドと本質を異にすると。さらにブレンターノの説については、古代の家族的結合が解體したとき、これに代つて新たな欲求を満すために各種の新制度が発生したことは事實である。マルク・都市・從者をもつ領主・ギルド・修道院團體・騎士團就中國家がこれである。家族的結合の解體は新しい秩序を生ずる機縁ではあつたけれども原因ではない。家族的結合に類似したものすなわち同胞的連帶責任をもつものはほかに、例えば修道院團體などにもあつたのであるから、あながちギルドのみには限らないと。そしてグロス自身はギルドをもつて人間の結合精神の自然的表現であると言つてゐる (Gross, op. cit., vol.1, pp. 169, 175-6.)。

註五 Gross, op. cit., vol.1, p.174.

註六 Gross, op. cit., vol.1, pp. 176-177.

註七 右の分類はグロスの分類であるが、デーヴィスはこれにエセルスタン時代 (925-40 A.D.) にロンドンにあつた保護ギルド (frith gilds) をも加えてギルドを四つのグループに分けてゐる。デーヴィスによれば、この保護ギルドはロンドンおよびそ

の近郊に出没する盜賊をおさえ、治安の維持をはかり、さらに一種の盜難保險の役割をも果していた組織であつて、その組織面について見れば、London Irish gild と他の都市において組織されたギルドとの間に、本質的な差異を見出すことは困難であるかも知れないが、ギルドの目的が相互扶助や友愛感情にあつたとすれば、ロンドンの保護ギルドも任意團體であつたか否かは別として、まさしくかような目的のために結成されたものであり、しかもこのギルドを認可したロンドンの律令集 (dooms of London, or *Judicia Civitatis Londonia*) は、明らかにロンドンの住民のためのものであり、それに服従する住民の團體が、イギリス民族の一般的な團體の例外として扱われていたことは、極めて重要な事實である。すなわちそれは團體としての自律性と獨立性への第一步を示すものとしてロンドンの保護ギルドはイギリスにおける最初のギルドであつたと言わなければならぬと。このデーヴィスの説に對してグROSSは *Judicia Civitatis Londonia* を the *Statutes of a London gild* と讀みうるものか、また、ギルドはその立法の結果たるものではなく、私的な行爲 (private action) の結果たる程度に任意的な組織でなければならぬとすると、そこに定められた組織は、決して任意の結社 (voluntary brotherhood) ではなく、單に治安目的のための強制的組織と思われるから、このようなものから一般的な推論を下すことはできないとしてこの見解を疑問視している。ともあれ三分説をとるも四分説をとるも、これら各種のギルドは決して排他的なものではなく、すべてがその中に宗教的・社交的要素を程度の差こそあれそなえていた。とりわけ宗教的要素は、ギルド發生から最後に崩壊するにいたるまで、ギルドの歴史をつらぬく強い要素であり、従つて、ギルドを論理的に分類しようとするときには、ほとんど超え難い障害となることが指摘されている。

(Davis, op. cit., vol.1, pp. 130, 133-135; Gross, op. cit., vol.1, pp.176, 178-179.)

註八 Holdsworth, *A History of English Law*, 1926, vol.8, p.193; Davis, op. cit., vol.1, p.148.

註九 Gross, op. cit., vol.1, p.3.

註一〇 Ashley, *An Introduction to English Economic History and Theory*, 1901, vol.1, p.70.

註一一 Gross, op. cit., vol.1, p.5.

註一二 Davis, op. cit., vol.1, pp. 149-150.

註一三 Gross, op. cit., vol.1, pp. 7-8.

註一四 今井登志喜 英國社會史上卷六四頁。

註一五 Pollock and Maitland, History of English Law, 1952, 2nd. ed., vol.1, p.664.

註一六 Gross, op. cit., vol.1, pp. 26-29.

註一七 Gross, op. cit., vol.1, p.29.

註一八 Cunningham, The Growth of English Industry and Commerce, 1915, vol.1, p.220.

註一九 Scott, Joint Stock Companies to 1720, 1912, vol.1, p.6.

註二〇 Davis, op. cit., vol.1, p.155.

第二 中世期における經濟團體としてのクラフト・ギルド

(一) クラフト・ギルドの結成

前章において考察した商人ギルドの勢力は、一二・三世紀をその頂點として、一四世紀頃には凋落のきざしを見せていた。それは手工業の發達に伴い、各都市に craft, fraternities, gilds, misteries 等の名で呼ばれる手工業者が増加して、各種手工業者がそれ／＼の團體を結成するようになったからである。これらの團體は後の時代にはクラフト・ギルド (craft gild) と呼ばれた。

中世の町 (town) においては、同種の職業に従事する職人たちは、特殊の街を獨占して同じ區域に近接して住むのが通例であつた。例えば、ロンドンでは織工はキャノン街に、鍛冶工はスミスフィールドに住み、ブリストルでは縫ひだ師 (tucker)、漂布工 (fuller) はタッカー街に住んでいた。そのために彼らは同一教區の教會に行くことになり、接觸の機會が多くなると交際の深まることも當然で、そうした場合に共通の話題が、職業上の事柄に集中し、共

通の利益を意識するようになるであろうことは、容易に了解される。かような雰圍氣の中から、各種の職業に従事する職人たちが、同職毎に相集つてそれ／＼任意的な團體を結成したのがクラフト・ギルドである。

この同職者の任意團體として出發したクラフト・ギルドが、都市によつて承認されたのであるが、手工業が發展し、彼らの製品に對して需要が多くなると、中には詐欺的若くは不良製品を作る者も現われるようになった。そのために買主を保護すべしとする世論が強くなつた。時折、ある職業の者が、彼らの職業について、その仲間の惡意や不正のために、惡評を立てられてゐる (badly put in slander) ことを知ると、彼等自身市長を訪れて、公認の監督者若くは分析者 (authorized overseers or assayers) を任命してくれるように要求した。都市當局も若干の職業の者が取締りを要請すると否とに拘らず、不正な仕事を發見して處罰するため、職業毎に適當な監督を置かなければならぬと主張していた (註一)。この段階においては、クラフト・ギルドの結成は任意的なものに、若干都市の強制も加えられ、また時としては、ある職種について全く強制的にクラフト・ギルドを結成せしめたこともあつたようである。

同職者のみによつて結成されたクラフト・ギルドに關する最初の記録は、ヘンリー一世の治世三一年の宮廷財政記錄 (Pipe Roll) に見られる。この記録によれば、ロンドン、リンカーン、オックスフォードおよびウィンチェスター等の織工ギルド、ウインチェスターの漂布工ギルド、オックスフォードの靴工ギルドが、國王の承認を得るために、財務府に金錢の支拂をなしたことが知られている (註二)。これは商人ギルドがはじめて結成されてから約半世紀後のことである。

當時における職業は大體小賣と手工業にわかれていたが、次第に細く分れるようになった。しかし、原則的には、その原料の加工から仕上げまでを一人の手工業者が行い、各製品はそれ／＼の職人から直に消費者の手に賣られ、手工業者間、あるいは同一の町の小賣商の間に商品の賣買が行われることはなかつた。職業の主なるものをあげれば、食料品では製粉業、パン屋、菓子屋、肉屋、酒屋、食料品商。衣類では、織物、仕立屋、帽子屋、呉服屋、小間物屋、靴屋、毛皮商。住宅關係では、大工、石工、指物師、硝子屋。金物關係では、金匠、甲冑師、刀劍師、鞍屋、鍛冶屋、金物商などがあつた。これらの職業の種類は町や都市によつて異り、また、その大小によつても異つていた。

商人ギルドの場合は、物品の販賣に従事するすべての人が包含されていたので、商人と職人との間に明確な區別がなされていなかった。従つて親方 (master craftsman) となつてゐる職人もすべて商人と見做された。ただし、彼らは原料を購入し、また、丁度、桶屋や靴屋やパン屋が今日でもなおそうであるように、自分の店や賣店で手細工の製品を販賣していたからである。すなわち手袋製造人は生皮を、パン屋は小麥を買い、肉屋は肉と同時に生皮を賣り、機屋や漂布屋や染物屋は、羊毛や染料を買い布を賣つた。鞣皮業者は樹皮や動物の生皮を買つて鞣皮を賣つていたのである（註三）。それ故に、一二世紀、一三世紀および一四世紀においては、職人 (craftsmen or artisans) は自由に商人ギルドに加入し、彼らも亦特權による庇護を受けることができたのである。しかし、商人ギルド内における職人の地位は、あまり有力なものではなかつたと思われる。何故ならば、當時の社會において取引の對象となつたものの多くは加工された商品ではなくして、原始生産物 (extracted products) であつたからである。經濟生活が長くこの段階で満足されうるとしたら、職人階級が都市における重要な存在となり得なかつたらうし、また、商人ギルドとは

別個の經濟團體を結成して自らの利益を擁護する必要もなかつたであらう。しかし、彼らは一二世紀から二三世紀の前半には、既に社會における重要な階級となつていた。そして間もなく市民權を與えられ、ギルドを結成してその構成員となることもできるようになつた（註四）。クラフト・ギルドはこの新たに擡頭した職人階級が、その都市における同種の職業の統制と獨占を目的として結成されたものである。

(二) クラフト・ギルドと商人ギルドとの相異

かように、クラフト・ギルドは同じ職業に従事する人々によつて結成された經濟的團體であるが、ひろく取引に従事するすべての人々を包含して結成されていた商人ギルドと如何なる點で異つていたかを見るに、商人ギルドの場合は、國王から彼らの所屬した社會すなわち都市を媒介として特權を與えられたのであるが、クラフト・ギルドの場合は都市自體の統治力が衰退して國家機關がこれに代るまでは、國王からではなく都市から特權を與えられた。このことはクラフト・ギルドが繁榮した時代には、都市そのものが強大な力をもつていたことを意味している。商人ギルドを結成する權限が都市に對する特許狀 (the charter of the town) にみられた時代には、その特許狀にクラフト・ギルドについては何も述べられていなかった。當時は都市がそれを構成するグループに、彼らの利益の追求を一般都市生活と調和せしめるために必要な組織をつくらせる權限を、國王から取得する必要を認めなかつたのであらう。換言すれば、商人ギルドには一般的に平等關係 (relation of equality)、クラフト・ギルドには、都市に承認された從屬關係 (relation of subordination) があつたのである。また、クラフト・ギルドにはそれが存在した都市の境界を超

えて行動し、且つ非居住者にもその特權を及ぼす權限はなかつた。craftsman が都市から離れて保護される權利をもつていたとすれば、それはクラフト・ギルドの構成員たる地位においてではなく、市民としての地位によつて保護されたのである (註五)。

(三) クラフト・ギルドと商人ギルドの關係

クラフト・ギルドは、嘗つて商人ギルドに所屬した職人が、産業の發展に伴つて獨自の經濟的利益をもつにいたつたために結成され、漸次勢力を得て都政に参加しうろようになったのであるが、この場合、既存の商人ギルドと利害の交錯・對立若しくは權力の衝突がおこつたのではないかと考えられるが、この點に關しては學者の見解が分れてゐる。多くの學者は、イギリスの商人ギルドは、都市の支配團體 (ruling body) であり、craftsman に對して暴威を振い、彼らに都市の商業に關する特權を分ち與えることを拒否した。そして商人達が貴族政治 (aristocracy) を行つていたと主張する。しかし、一二・三世紀のイギリスの都市における統治形態は、寡頭政治的なものではなく、普通の極めてありふれた形態のものであつた。craftsman を都市ならびに商業上の特權から、全般的に排斥したという理論を支持するために提出された、もつともらしく思われる唯一の證據は、ロンドン、ベバリー、オックスフォード、マルボローおよびウィンチェスターにおいて、若干の機屋や漂布屋が完全な市民權を享有していなかつたという事實である。しかしながら、これらの職人 (artisans) の市民權に關する制約は、おそらく彼らが比較的新しい産業部門を開拓しようとして、割込んで來た外來者と見做されていたという事情に基因するものと考えるのが合理的である。

若しイギリスの craftsman が一つの階級として、市の特権から排斥されたのであれば、當時の記録の中に、確實な證據が見出される筈である。従つて、かような例外的事實から一般的推斷を下すことは誤りで、craftsman が原則として市の特権を享有し、且つ自由に商人ギルドの構成員となつていたことを證明する證據が多く存在しているのである。

さらに一四世紀以降、イングランドの到る處で、商人ギルドとクラフト・ギルドが闘争し、クラフト・ギルドが勝利を得、都市の政治が民主化されるにいたつたというようなことは、すべて架空の話 (myth) である。かようなことが一般に信じられているのはブレンターノの説に影響されたもので、ドイツに見られたようなギルド闘争 (Zunft Kämpfe) はイギリスにはなかつたとグロスは言っている。そしてその理由を、彼は、イギリスにおいては、王權が強力であつたこと、都市の統治形態が大體において民主的であつたからだとしている (註六)。

(四) クラフト・ギルドの構成とその機關

商人ギルドの場合は後に構成員中に貧富の差が生じたが、原則として物品の賣買に従事する者であつた。クラフト・ギルドにおいては、それが十分に發達した時期には、その構成員は親方 (master)、職人 (journeyman) および徒弟 (apprentice) の三階級に明瞭に分化していた (註七)。彼らは皆同じ仕事をする者として同じギルドに属していた。勿論ギルドの中心をなす者は親方であり、彼は自分の仕事場を持ち、自己の計算において仕事をしていたが、常に數人の徒弟や職人をもつていた。親方の身分と徒弟の身分とのへだたりは、さまで大きなものではなく、徒弟は

一定期間の年期奉公（この期間は始め不定であつたが後には七年となつた）をして、仕事に關する特殊の技術的熟練を身につければ、直に親方となるか、またはある期間職人として働いたのち親方となつた。そこで、徒弟となることはギルドの一員となる道であり、市民となることのできる道であり、さらに親方の身分を得る道でもあつた。かように、親方、職人、徒弟の三者間の地位の懸隔が甚だしくなかつただけでなく、ギルド構成員相互の間でも平等の原則が支配していた。すなわちすべての徒弟は他のすべての徒弟と同じ權利をもち、すべての職人は他のすべての職人と同じ權利をもち、すべての親方手工業者は他のすべての親方手工業者と同じ權利をもつていたのである（註八）。徒弟は年期を終えると獨立の職人となつた。彼は最早親方の許で生活する必要はなく、何時でも親方を變えることができた。その場合、親方との雇傭契約は一週とか一ヶ月とかと定めることもあつたが一年を期限とするものが最も多かつた。彼らは親方のために仕事をしたので、賃銀を支給された。彼らはその一部を貯蓄して、やがて一人前の親方として、獨立の店舗を構える準備をした。しかし、一五世紀になると、親方になることが、從來のように簡單ではなくなり、製作品を提出して、ギルドの要求する技術試験に合格しなければならなくなつた。

クラフト・ギルドの管理體制も、商人ギルドのそれと大體同じで、ギルド員の全員によつて構成される總會（この總會は *hallmote* と呼ばれた）をもち、年に一回から四回開催された。總會の議事の主なるものは、執行機關の選舉、定款その他の法規の制定、豫算の決定等であつた。

ギルドの執行機關として最も重要な地位を占めるものは *master*, *bailiff*, *warden*, *overseer* と呼ばれ、原則として、ギルドの總會においてギルド員の中から選舉された。その員數は小さなギルドでは一人で、彼はギルドの有力者

や評判の良いギルド員の非公式な助言を得て、その職務を執行した。大きなギルドにおいては一人の *master* が、ギルド員によつて正式に選任された二人ないし六人の *warden* によつて補佐された。*master* の権限は、ギルドの業務の全般にわたつたが、重要な仕事は集會におけるギルド員の秩序の維持、ギルド員がギルドの規則を守つて仕事をしているか否かについての監視、ギルド員間の紛争の仲裁、ギルドの慈善事業の執行および都市その他の官廳に對してギルドを代表することなどであつた。*master* は通常無報酬で奉仕するか、若くは極めて僅少な謝禮を受けるに過ぎなかつた。しかし、大きなギルドではその額は少額であつたが俸給を受けていた。*master* は常に市長の面前で宣誓することを要求され、その任務に懈怠あるときは處罰された。

ギルドの構成員はギルド員全部の同意若くは役員の同意を経て加入を認められた商工業に従事する者であつた。そして都市においては、ギルド員かさもなければ少なくともギルドに贈物をした者でなければ、ギルドを利用することができなかつた。一般人がギルド員となることを希望するときは、ギルド員に自分がギルド員たる適格をもつてゐること、信頼し得る者であることの保證を必要とした。また、ギルドに加入するために、外來者や徒弟はギルドの規則を守ることを宣誓し、加入金を支拂わなければならなかつた（註九）。

(五) クラフト・ギルドの活動

クラフト・ギルドは商人ギルドと同様に、その構成員の經濟的利益の獨占を主たる目的としたために、その經濟活動を統制する必要があつた。そのために *points* と彼らが呼んだ規則を制定した。これは生産者と消費者の雙方に對

して、公正な價格で正直に取引し、仕事をさせることを主要な目的としたものである。この規則の中には、ギルドが獨自に制定したものと、ギルドが制定しこれを都市が承認したものと、都市の手によつて發案され、都市によつて制定されたものがあつた。都市は各ギルドに對して、商工業に關する統制を一任していたのであるが、都市自體もこれを統制する必要があつたからである。何故なれば、ギルドはその生業については、生産者であるだけに、生産者の利益を市民すなわち消費者の犠牲において、主張する危險があつたからである。當時の市會はギルドの代表者によつて構成される場合と、地區代表によつて構成される場合とあつたが、何れにしても消費者の利益を代表すべき立場にあつた。ギルドの代表者も、他のギルドの製品に對しては、それ／＼消費者の地位にあつた。従つて、あるギルドと都市との對立が起るとすれば、市會全體としては消費者の利益を擁護せざるを得なかつたのである。

ギルドによつて選舉された *maser* や *warden* は、當時、ギルド員の店舗や仕事場を檢査する權限をもつていた。この役員の監督を効果的にするために、ギルド員は一定の場所で一定の時間内で仕事をしなければならなかつた。

ギルドの規則に違反したギルド員に對する處罰は、定時の總會において爲される場合と、ギルドの役員によつて構成されるギルド裁判所において爲される場合とあつた。處罰の方法も違反行爲の性質や違反の程度によつて異り、ギルド員が不完全で詐欺的な品物を作つた場合は、裁判所においてこれを破壊するか、沒收するか、改造するように命じた。また、罰金を課することも、投獄することもあり、ギルドから除名することもあつた（註一〇）。

以上は中世期における經濟團體として、都市中心時代のイギリス經濟社會に君臨したクラフト・ギルドの生成・發展に關する史的素描であるが、このギルドが何故に衰退しつゝ變容をとげざるを得なかつたのであろうか。

- 註一 Ashley, *The Economic Organization of England*. 1914. p.31.
 註二 Gross, op. cit., vol.1, p.114; Davis, op. cit., vol.1, pp. 190-191.
 註三 Gross, op. cit., vol.1, p.107.
 註四 Davis, op. cit., vol.1, p.199.
 註五 Davis, op. cit., vol.1, pp. 204-205
 註六 Gross op. cit., vol.1, p.109.
 註七 徒弟制度は一四世紀以前に一般に承認された制度となっていた。
 Cunningham. op. cit., vol.1, p.349.
 註八 Huberman, *Man's Worldly Goods* 小林・雪山譯三七頁。
 註九 Davis, op. cit., vol.1, pp. 165-166.
 註一〇 Davis, op. cit., vol.1, pp.174-175.

第三 ギルド制度の變容と Company of Merchants および London Livery Companies

(一) ギルド制度の衰退・變容

既に述べてきたように、イギリスにおける都市の形成は商業の發達と相關的な關係をもつていた。否むしろ商業の發達の最も重要な結果が都市の成長であつたといえる(註一)。従つて、都市生活と經濟生活とは分離することのできないものであつた。それ故、一二・三世紀において商人ギルドが、それに續く二世紀の間においてクラフト・ギルドが都市生活の諸分野を支配しえたのはけだし當然のことであつたろう。しかし中世の經濟生活が何時までもその儘

の状態で留まりうる筈もなく、その中には既に近世經濟社會への胎動が感じられていた。しかもその動きは中世經濟に依據したギルド制度 (guild system) を内からも外からも搖がし、やがて大きく變貌せしめずにはおかぬものであつた。

ところで今一度、商人ギルドからクラフト・ギルドに移行した過程を振り返つてみよう。クラフト・ギルドが發達するためには、生産手段の多様性乃至は複雑化がその前提とならなければならない。中世イギリスの社會狀態は農業を中心としていたが、農産物が取引の目的とされる主たる商品である限り、そこにはクラフト（手工業者）の發生する餘地が少ない。しかし手工業的產物に對する要求が増加するに至ると獨立のクラフトが發生する。彼らは當初需要者からの注文によつて、その原料や道具を用いて生産していたが、製品に對する需要が増加し、一方クラフト自身の側にも資金が蓄積されてくると、注文を待たずに自らの原料と道具を用いて生産するようになる。このようにして、クラフトは次第に自己の必要とする資本の供給者となつていつたので、彼等には資本家的な性格も窺えた。商人ギルドからクラフト・ギルドに移行したことの意義は、商業資本 (trading capital) に關連して比較されるような産業資本 (industrial capital) の社會的重要性が進んだ點にあるといわれる（註二）のもこの故である。しかし現實にこの段階において資本の演じた役割は極めて小さかつた。すなわち、極めて閉鎖的なクラフトの社會を支配するものは依然として道具や技術的熟練であつたから、資本はこれらに對して附隨的な意味をもつたにすぎなかつたのである。従つて、クラフト・ギルドを大きく特徴づけるものは徒弟 (apprentice) 制度であるといふことができる（註三）。

しかし徒弟制度に支えられたギルド組織が永續し、相互に排他的でありうることは、社會の單位が地域的で、都市

社會も自足的であり、需要と供給とがその限られた地域の人口に相當するものであつて、しかも都市社會が大體におもつた民主的 (democratic) な、集積資本 (aggregated capital) の影響も少なく、産業過程が比較的單純で、原料 (raw material) の生産者と加工品 (finished product) の消費者との間に幾つものグループの介在が殆んどないという限りにおいて可能であつた。すなわち、クラフト・ギルドを發生せしめた社會關係の固定化がその要件であつた。事實、イギリスの社會が、秩序の安定と存續、すべての社會關係の固定化という中世的な理想に未だマッチした狀態に留まつていた一五世紀の前半まで、概してクラフト・ギルドは商業や工業に對する有効な統制組織であつたといふことができる (註四)。

しかし一つの經濟組織の成立原因は、またその破綻の原因ともなりうる。生産手段の複雑化はクラフト・ギルドを發生せしめたが、またそれを破綻にも導いた。ギルド制度の變貌・衰退はその制度の完成をみたとき既に始まつてゐる。

われわれは、その手掛りにまず都市における人口の増加を考えなければならぬ。アシュレーによれば、『ノルマン征服の當時イングランドには約八〇の都市があつた。これらの多くは、今日では大きな村落としか考えられぬものであつた。ただこれらを取巻く土塀や、或はこれらを見張る土堤などのあることによつて周圍の村落と區別せられた。ロンドン、ウインチェスター、ブリストン、ノーウィッチ、ヨークおよびリンカンも規模においても重要なものゝ一つであつた。しかしこれらの第一流の都市でさえ七・八千の住民を有するに過ぎない』状態であつたのである (註五)。だが今までも明らかなように次第に商業が發達し、貨幣經濟が進んで、都市が勃

興してくると、都市の人口は激増し始める。それには人口の自然増加も與つて力があつたであらうが、なによりも農村人口の都市への集中が擧げられねばならない。都市が國王や領主達から購入した自由は、當初は農民達に封建的束縛を斷ち切る手段を與え、農業を捨てた農民達を吸引する役割を果していたが、後にはいわゆる圍い込み（*enclosure*）等の社會現象によつて作り出された農村の餘剩人口が、都市に流れ込まざるをえないことになる。ともあれ人口の増加と都市生活の向上とは消費の増大と産業の發達を促す。

本來、クラフト・ギルドは限られた地域的な産業統制組織であつたから、このような取引範圍——商業市場の擴大はクラフト・ギルドの統制を一層重要ならしめる。しかし飛躍的な經濟發展は、排他的なギルド相互の距離を縮め、その間に各種の關係を醸成し、また生産手段の複雑化は産業の分岐をもたらし、かくてギルドの統制の及ばない分野を限りなく創り出していく。この傾向を決定づけたのは外國貿易の増大であつた。すなわち諸外國との通商は國民的規模において行われざるをえなかつたため、地域的なギルドの防壁が打ち破られた。従つて取引が擴大すればする程多くの統制措置を必要とするのに、結局如何なる人爲的な統制も効を奏しなくなつたところに、中世經濟社會、ひいてはクラフト・ギルドの終熄があつたのである。

こうした過程は外部からクラフト・ギルドを全般に没落せしめるに不可避的な過程であつたが、ギルド制度の内部からこの傾向に拍車がかけられた。それは徒弟制度の崩壊である。

われわれは既にクラフト・ギルドを特徴づけるものとして徒弟制度を擧げておいた。徒弟となることが親方となる徑路であり、またギルド構成員の間が平等であるということが、少くともクラフト・ギルドの基本的な性格であつ

た。しかし年月の経過はこれを變えた。ギルドが繁榮するにつれて、ギルド自體の間に富裕な勢力あるギルドを生ぜしめるとともに、ギルドを構成する者の間にも貧富の差が生じてきた。かつては、なるべく多數のメンバーを獲得しようとして努力していたものが、次第に自らの既得權を守ろうとする努力に變つてくる。こうした變化はまず富裕な親方達による親方數の制限、メンバー數の制限、そして當然に徒弟資格の制限となつて現われてくる。ここにおいて徒弟から親方への徑路が原則ではなく例外となつた。親方の地位は世襲され、徒弟の行きつくところは職人の地位でしかなかった。ギルドの内部において、技術や勞働のみを提供し永久に親方の下に立つ職人の階級と、次第に商人や經營のみに携わる事業の所有者となつていつた親方の階級とが分離する兆しは、早くも一四世紀の中頃から認められた。かくして富裕な少數の親方達は、ギルドの實權を掌握し、ギルドの特權や利益を自らの手に收めるために、彼等の間で結合し、また名目的にはギルドの構成員であるが、ギルドの特權に参加することも保護をうけることもできない職人の階級は、ギルドのモーテンリー組織 (yeomanry organization) に發展する (註六)。この傾向は後述する Livery Companies に最も端的に示される。

このようなギルドの内部に生じた變化は、クラフト・ギルドをいわゆる社會的縮少 (social shrinkage) と呼ばれる過程に迫り、ギルド本來の機能をも變化せしめた。かつてのギルド生活には別個の二面があつた。すなわち、商人 (tradesmen) や職人 (craftsmen) が營業することと、その營業を統制することであつたが、多くのギルドにおける寡頭支配は、單に取引したり製造したりすることを望むにすぎぬ者と、實際にギルドの宴會に出席し、役職に就き、いろいろな權限の與えられることを期待する者との區別を明瞭にした。前者が最後にギルド組織から締め出され、後

者だけがギルドを構成することになると、統制權の行使のみがギルドの機能となる。かくしてギルドの構成員たる地位は益々、そのギルドに冠された名稱が示す商業や工業とは縁が薄くなり、一方ギルドの行使する經濟活動の統制權もその實を失つていつた。一六世紀の中葉以後クラフト・ギルドは、若干の産業分野において、その産業の外部に位置して名目的な統制權以上のものを殆んどもたずに、手數料の形で收入をうるにすぎない、その管理機關 (governing body) のみから成る極めて閉鎖的な團體にまで縮少していくのである (註七)。

このクラフト・ギルドの社會的縮少と並行して、その獨占制度をなおも維持しようとする努力が執拗に試みられた。ここにギルドの組織的變容が始まる。

前述のように、ギルドを支える社會的地盤が失われたとき、これに代る新たな經濟組織が完成するまでの過渡期を、ギルドはその存在理由を變え、またこれに適合するよう複雑多様な分裂や合併を繰り返しつつ、制度の維持を計つていつた。従つてその多様な變容の過程は、そのままに没落に瀕したクラフト・ギルドの苦悶の現われであつたともいえよう。勿論その分裂や合併現象の中には、ギルドの發展に伴う必然的なものもあつた。たとえば或る特種の手工業の發展が、その工程に幾つかの大きな差異を生ぜしめたときには、一つのギルドが別個の幾つかのギルドに分割された。また或る商業 (殊に羊毛取引) が極めて高度に發達したときには、消費者と生産者との間の幾つかの過程がそれぞれ別個のギルドによつて代表せられた。また、これとは逆にこのように次第に發展する分業とともに著しい増加を示したクラフト・ギルドが、相互の關係が密接したことから再び結合するような場合、あるいは外國人の手工業者に對抗するために協力關係を結んで結合する場合、さらには小都市における諸種の小規模なギルドが、維持費輕減のた

めに合併する場合などである（註八）。しかしその多くは商業市場の擴大に伴い重要性を益々増してきた資本によるギルド支配の姿であつた。換言すれば、ギルドは資本の支配に服することによつてのみ、なお暫くは制度の維持をはかることができたのである（註九）。

このことは、漸次多くのギルドの間に存在するようになった諸關係の中、手工業者のギルド（artisan crafts）が常に商人のギルド（trading crafts）に従屬していたという事實の中に暗示される。すなわち、或種の關連する一連のクラフト・ギルドの中、技術上最後の工程にあるものが消費者と直結することから結局商人となり資本家ともなる場合、あるいはそれらの中の一つが他の全部を資本的に支配することから統制權を行使する場合などである。また一五世紀には主としてロンドンの Livery Companies にみられるような、一産業内部における上級組織の商人的支配または資本的支配が目立つてくる。さらに一六世紀には、ロンドンを除く各都市に、一應手工業とは關係のない商人の團結すなわち Company of Merchants が出現する。

ここに至つて、これまで無難作に用ゐられてきた『商人』（Merchant）なる言葉の持つ意味が検討されなければならない。グロスによれば、Merchant という言葉には三つの發展段階があるという。すなわち、當初それは、その職掌柄、何らかの形で賣買に關係するもの、従つて小商人（petty shopkeepers）や多くの手職人（handicraftsmen）をもすべて含むものであつた。一五世紀並びに一六世紀の大半においては、特に轉賣を業とするもの——すなわち小賣商人（retailers）および卸賣商人（wholesalers）の意に用ゐられ、手職人（manual craftsmen）は含まれてゐない。それから現在の多方面に亘る商人（extensive dealer）の意味をもつようになつた。そして概念上、昔の商人ギルド

は第一の段階に、Companies of Merchantsは第二の段階に、後に詳述する機會を持つ the staplers & Merchant Adventurers は第三の段階にあたる、と(註一〇)。

従つてこれまで述べたたつたギルド制度の變容若くは再編成の過程は、その行手にマーカンティリズム (Mercantilism) の勃興に呼應して商業資本を背景とする純粹の、すなわち今日的な意味での商人階級の擡頭、ひいては新たな經濟組織形態の登場を示唆している。

われわれも右の動きに歩調を合せて、さうして Company of Merchants 及び London Livery Companies の二つをとり上げて考究を進めなければならぬ。

(一) Company of Merchants

さて、論を進める前提として、前述の“Merchant”という言葉と同様に、このさういふ“Company”の語義をも明らかにしておかなければならぬ。“Company”という言葉は語源的にはラテン語の cum と panis に由來する。すなわち、“gild”という言葉と同じく共に食事をすることを意味し、本來はこのような人々の團體を指すために用いられた(註一一)。

Company of Merchants もこの言葉が本來意味するところから左程隔つてはおらず、それは或種の利益を共通にすることによつて作られた商人達の團結若くは商人達の組合團體といふべきもので、本質においては、各種の商業的性格のクラフト・ギルドの連合から成る、變貌を遂げたギルドであつた(當時、このようにギルドの或るものがカン

パニーと呼ばれることが多くなつた。従つて、今日われわれが理解するような會社企業としてのカンパニーとは全く別物であることが留意されなければならない。このことは次項に述べる London Livery Companies についても同様である。

Company of Merchants は、商業的性格のギルドが多く存在しなかつた處では、手工業者から轉化した商人も包含していたが、概して一都市の商業的性格のギルドの連合から成つており、特定商品の取引について獨占權を行使するものであつたから、往時の商人ギルドの機能の多くを受け繼いでいた。しかし商人ギルドがその中に商人と職人とを包藏していたのに較べ、商人のみをその成員とする點で根本的に異つてゐる（註一二）。

またその存在についてもロンドンのような大都市では、生産も極めて多岐に亘り、職業の細分も甚だしかつたので、Company of Merchants の存在をみることは全くなかつた。記録によれば、アルヴィック、カーリッスル、ダブリン、ペバーリー、チェスターフィールド、モーペス、ハル、ヨーク、サリスブリーおよびドチェスター等に存在していたことが明らかである（註一三）が、その數はそれ程多くはなかつたので、組織も各地で非常に異つていた。そこで最も典型的なものと考えられているダブリンのそれを通じて、その組織および活動に觸れる（註一四）。

ダブリンの Company of Merchants すなわち、"Gild of the art of Merchants of the city Dublin" は、一四五一年にヘンリー六世から設立の特許狀を得た。その主要役員は二人の master と二人の warden であり、master の主な職能は、年四回の總會の議長をつとめ、カンパニーの命令が正しく遵守されることや、祝日に禮拜が行われることを監視することであり、warden の職務は上納金や年四回の會費の取立をなすことであつた。一六五七年には二

四人の參事會 (council) が、カンパニーの業務運営のために任命され、これは次第に master および warden の選任權や、カンパニーの代表者を市會に送り込む權利を總會から奪つていつた。一六七九年になると、當時の約四百人のメンバー中、參事會の選んだ六名のみが年四回の總會に出席し得ることとなり、このような傾向はカンパニーの役員が市當局と結び付くとともに益々強くなつていく。

一方、他のギルドに對する關係においても、このカンパニーはダブリンにおける最も有力・重要なものであつた。けだし、市當局に融資することが多かつただけでなく、エリザベスの治世には市の租税の三分の二を負擔し、殘餘を他のギルドが負擔するという狀態であつたからである。一五七三年には、『他のギルドに所屬する者は、該ギルドを脱退するまで本ギルドの一員となることを得ない』ものとされ、これらの者は、あらゆる商品の販賣をなすことができずに、ただ特定の一種の商品を小賣し得たにすぎなかつた。さらに、一五七七年にエリザベス女王が、食料品以外の、この都市に持ち來たられたすべての商品についての賣買獨占權を賦與して以來、外國人はカンパニーの成員を通じる以外、この都市では一切の取引をなすことができなかった。従つて彼らはカンパニーの common hall で商品を賣りに出し、これ以外の場所で賣られた商品はすべて、カンパニーの役員によつて沒收せられた。

ダブリンの Company of Merchants にみられる、極めて興味ある特色は、市の共同購入の管理であつた。すなわち、市の役員が市の名義で積荷 (cargoes) を購入し、それから商人である市民の間に持分に應じて分配され、何人と雖も市當局がその購入を拒絶しない限り、港に陸揚げされた商品の購入が許されないとというのが、商品、殊に食料品の平等な分配を確保し、買占めを防ぎ、價格を抑制するために、當時のイングランド、アイルランド、ウェールズ

およびスコットランドで行われていた極めて一般的な慣行であつたといわれる。しかしダブリンでは、このような購入の獨占權をカンパニーがもつていた。カンパニーの二人の master は常時四人の買方 (buyer) の中に加わり、二人の warden は購入された商品を『正確に全員に分ち與える』ための分配者であり、交付者であつた。主要な取引品目は、葡萄酒・石炭・鐵・鹽・瀝青および樹脂等で、買方が共同購入をすると、master と warden はカンパニーの全員を召集し、各人がどの程度の分け前を望むかを確め、全員の要求が充された後、餘りがあればさらに全員に分たれた。購入品が全員の要求を充すに足りないときは、各人の商業上の序列に應じた分け前を受けた。このように商品が分配・交付されると、全員の集會でその商品についての相當なる價格 (reasonable price) が定められ、それ以外の價格で販賣するときは重い罰金を課された。従つて何人もカンパニーの買方が購入を拒絶しない限り、積荷の購入申込を許されず、その時でさえも買方の許可なくしてはその一部の購入すら不可能であつた。このような許可が與えられると、以前その商品の一部に對して希望を表明していた商人のすべてが、正當な分配を得ることができた。なおカンパニーの構成員は總會で論議せられたすべての事項、殊に商議の秘密を嚴守すべきことを誓わされた。

以上述べたような共同購入が、一般に他の都市の Company of Merchants によつても行われたと斷定するには記録が餘りにも乏しすぎる。しかし當時の事情から推して、グロスは極めてありうることだとしている (註一五)。

(三) London Livery Companies

ロンドンの livery companies は、一般に初期のギルドの發展した形態といわれ、特に一六世紀の中葉以後はギルド英國における會社企業の生成とその法規整

ド制度の生残つた好例となるので注目を浴びる存在である。その成立は早くも一三世紀に遡る(註一六)。當初にあつては、その時代の他のクラフト・ギルドと何ら異なるところはなく、商人(tradesmen)や職人(artisans)の經濟生活を統制するための社會組織(social organization)であつたが、概してギルド制度が、一六世紀の中葉以後產業界の效果的な組織でなくなつたとき、livery companies も決してその例に洩れなかつた。しかし彼らを支える條件には、その他のギルドにおけると多少異なる特殊性があつた。すなわち、livery companies は、(1)ロンドン市との密接な關係により、(2)強固な權力をもつに至つた中央政府がその機關として利用したことにより、(3)ロンドンの極めて富裕な階級の勢力誇示に役立つことにより、(4)國家や都市の財政的需要を充たす組織として利用されたことにより、そして(5)彼らの蓄積された團體財産の力によつて、なおも現代に至るまで存続しつづけたのである。それ故に、livery companies の歴史は、その組織のうちにあつて行われた活動は別としても、一つの團體組織が永續した興味ある實例であるといわれる(註一七)。

次に、右に掲げたこのカンパニーの特殊性を検討しながら、その組織・權限および活動を概觀してみよう。

前にも觸れたように、ギルドの内部に商人的支配の傾向が強まるや、構成員の間の階層的分離が明確となつてきた。かつてのギルドは、その中に相異なる經濟的利益を網羅した緩やかな組織であつたが、ここに同種の利益の凝集が始まつたのである。富裕な親方達は livery companies へ、職人達はヨーマンリー組織へと發展し、一六世紀も半ばを過ぎると、カンパニーの内部において構成員を差別するという状態から脱して、兩者は全く別個の組織へと分化した。このようにして livery (制服) を着用した者と著用できない者となつた者との間には永久的な差別が生じ、前者はカン

パニーの支配團體 (ruling body) となり livery 以外のヨーマンリーは、前者に従屬して殆んどカンパニーの運営に發言力をもたなくなつた (註一八)。

本來、カンパニーの成員は、親方も職人も均しく、ロンドン市から制服すなわち特色ある衣服を身に著ける許可を得たので、彼等のカンパニーは制服組合 (livery company) の名を以て呼ばれた。しかし親方の地位が次第に制限的・世襲的なものとなるにつれ、特權の附着した制服は非常に高價なものとなつて、遂には成員の中の限られた者のみが著用しうることとなつた。これを制度化したのが、ここにいる livery companies の成立である。livery は主として商的機能を營み、工的機能は livery に從屬するヨーマンリーに負擔せしめられた。livery companies において如何に商人的支配が顯著であつたかは、ロンドンの一二の有名な大カンパニーのうち、半數以上が成立の時から商人のみの結合であり、またその餘のものについても手工業者が商人に依存する狀態であつたことから窺える。

このように制度化した livery companies の構成は、その成因から推しても當然に寡頭政治のそれ (oligarchical constitution) であつた。すなわち、團體活動の中心は理事會 (the court of assistants) がこれを掌握していた。これは終身その地位に在る一〇人から三五人までの團體で、自ら缺員を補充しうるばかりでなく、カンパニーのすべての役員についての選任權並びにカンパニーの業務全般に關する指揮權をももつていた。執行役員 (executive officers) は一人から六人までの warden で、その主要執行者 (chief executive) をカンパニーによつては prime warden と呼んだ。彼らは毎年、理事會によつて liverymen の間から選任され、直ちにまたは prime warden の椅子を経過後、理事會の一員となつた。liveryman の團體すなわち the livery も、大カンパニーにあつては五〇人から四〇〇

人までその規模を異にしていたが員數に制限があり、理事會によつて、富裕で有力な (wealthy and influential) freemen からのみ選ばれ、理事や役員もそれに加わつていた。たとえば一六九七年に、ロンドンの長老會議 (the court of aldermen) は、『何人も千ポンドの財産を有さざる限り一二のカンパニーの、また五百ポンドの財産を有さざる限りそれ以外のカンパニーのいずれの制服をも受けることを得ず』と定めている (註一九)。

このようなカンパニーの構成の底部には、一般の親方達から成る freemen がいた。freemen は特權 (freedom) (註二〇) への参加者とみなされ、その資格を取得するには次の四つの方法があつた。すなわち、(1)七年の徒弟奉公により、(2)世襲財産 (patrimony) すなわち出生により (註二一)、(3)買入により、そして(4)名譽のための賦與によつた (註二二)。しかし freemen と livery との間には通常殆んど超え難い境界がひかれていたので、freemen がカンパニーの成員の一部であるということが出来るのは極く限られた意味においてであつた。従つて freemen から livery に昇進するためには、相當の加入金を要したのである。

以上に概觀したカンパニーの寡頭政治的な構成は、エリザベスの治世の初めには一つの社會的事實となつていた。しかしこのような發展的構成が特許狀にて明確に承認され、認可をえたのはジェームズ一世の時代においてである (註二三)。

さて、このような構成をもつカンパニーは、如何なる權限をもち、どのような活動を行つたか。先ずその權限についていえば、それは同時代の他のギルドと同様に産業に對する統制權であつた。彼らによつて行使せられたこの權限には三つの傾向のあつたことが認められている (註二四)。すなわち、

(1)カンパニーの成員關係は、カンパニーの名稱にて示される産業 (trade or craft) と益々關連が少なくなつた (註二五)。従つてカンパニーの統制權は、獨占的な生産または販賣權というより、取引される商品についての獨占的な検査・檢印の權限であつた。

(2)カンパニーの分割は、産業の分岐數の増加と均衡を保つていなかつた。しかしカンパニーの統制は極めて緩やかに行われたので、新たに分化した職業も依然として古くからの組織の統制に服し續けた。

(3)カンパニーの權限は、ある場合にはロンドン市を超えてイングランドの全體に及ぼされた。このように一六世紀以降、カンパニーの權限の全國に亘る地理的擴大が行われる (註二六)。

しかし彼らの活動は、産業統制のみに止まらず廣い分野に及んだ。むしろこの點にこそ livery companies の特殊性が窺えるのである。

第一にこれらのカンパニーは、國家や都市に對して金融機關の機能を果していた。東インド會社 (East India Company) やその他の大きな外國通商會社 (foreign commercial companies) や一七世紀末のイングランド銀行 (Bank of England) の設立をみるまでは、國家がその財政的需要を充たすために頼ることのできる資本の組織 (organization of capital) —— 金融機關が全く存在しなかつた。従つて、經驗から一層便宜な制度が發展せしめられるまでは、livery companies を通じて行動するロンドン市がこの要求を充たしていた。このことはロンドン市自體についてもゝえた。かくして、Civil War と共和國の時代には、チャールズからも議會黨 (Parliamentary Party) やクロムウェルからもカンパニーに融資が強要された。融資の手續は、通常ロンドン市長 (the mayor of the city) に奉仕を請求す

ることであつた。市長は、この請求をうけると、順次各カンパニーに對して融資の命令書 (precepts) を發し、各カンパニーの基金や借入金あるいは各メンバーの分擔から資金が醸出された。これは確かに未熟な手段ではあつたが、カンパニーの重要性を増し、それが永續しうる支柱となつた。

第二に、これらのカンパニーは多くの場合海外貿易や新しい土地を植民地化するための原動力となつた。すなわち、あるときは自ら率先して發見航海 (voyages of discovery) や新たな土地の植民地化や外國貿易の確立に努め、たし、あるときには國王の求めによつて冒險資本 (adventure capital) を出資せしめられた。たとえば、一六〇九年 South Virginia 植民地化のために賦與せられた特許狀には、ロンドンの重要な livery companies の殆んどすべての名が “adventurers” として現われつゝる (註二七)。

その他、戦時には船舶や割當兵員の調達を行い、また法律や布告施行の媒介となり、病院や養老院や學校の管理維持なども行つていたが、饑饉の際使用するための穀類の供給維持も重要なその公的活動の一つであつた。これは饑饉によつて穀類の市場價格が高騰した場合、相當價格 (reasonable price) で人々に穀類を販賣するために、かかる供給を維持するのがロンドン市の慣習であり、その實行がこれらのカンパニーに課されていたのである。

livery companies がこうした廣汎な活動をなしたゆえんものは、疑いもなくその強大な財力にあつた。彼らはロンドンの偉大な商業財貨 (commercial wealth) の組織であり、しかも一二の大カンパニーは、それぞれの部門においてロンドンの商企業 (trading enterprises) に投下された資本を象徴していた (註二八) のである。

このような莫大な富が如何にして蓄積せられたか。それは一方において、メンバーやその他の者が各種の目的に基

づいてなした財産の贈與または遺贈の結果であり、そうした財産からの収入でさえ往々にしてカンパニーが信託 (trusts) の履行に要した費用を超え、カンパニーを裕福にする餘剰を残したのである。他方、徒弟となる際に支拂われた加入金、メンバーによつて定期的に支拂われる會費、統制違反を理由として課された罰金、または商品の検査・検印や度量測定器具の検査などの手数料も有力な財源であつた。さらに liverymen は例外なく富裕であつたので、團體基金が足りないときは彼らに頼ることもできた (註二九)。

こうして、livery companies がロンドンにおける富の支配者となつたとき、市當局や國家に對して極めて有力な存在を主張しえたことは、當時の情勢から推しても容易に首肯されるところである。のみならず市に對する關係では、少なくとも市の特權 (freedom) そのものが livery companies の有する特權の結果であつたといえる。一四世紀末以降、カンパニーは市會に有力な代表を送つて市の政治に關與し、その長老 (alderman) は市の區 (wards) を代表していた。またすべての liverymen から成る common hall は市と無關係に二人の長老を指名し、その中の一人が長老會議 (court of aldermen) によつて市長 (mayor) に選任されたので、市長はその立場から、時として “master of all the companies” とか “warden of all the companies” などと書かれていたのは、この間の事情を物語つてゐる。common hall はやがて sheriffs, chamberlain その他の市の役人の選任權をも有し、選舉法改正條令 (the Reform Act) の成立までは議會の議員すら選任していた。要するに、イングランドの首都ロンドンは、本質的に livery companies の連合以上のものではなかつたのである (註三〇) (註三一)。かくして一度、カンパニーそのものが市の政治に關與することが認められると、その團體としてのすぐれた活力は、市の政治を殆んどすべて吸収し

てしやうことができた。カンパニーが永續しえた一つの理由は、彼らが市政府と多分に同一であり、その政治權力の行使に彼らを永續せしめうる機能を見出した點にある。

國家に對しても *livery companies* は、嘗つての商人ギルドやクラフト・ギルドよりも一層積極的な地位を占めていた。すなわち、これらのギルドが通常都市に從屬していたのに較べ、カンパニーは特許狀によつて直接國王からその團體性の承認をうけていたという點で本質的に異つてゐる(註三二)。従つてこれらのカンパニーの連合から構成されるロンドン市自體は、その利益においても不利益においても、イングランドの他の都市よりずつと國王の政府(*royal government*)に近かつた。その權限は國王に代表される中央集權的な勢力(*the centralizing influences*)によつても容易に變更されえない程強大であつたが、反面その義務も重かつた。しかし王權(*royal power*)の伸張がより大きな國家的性格の奉仕を要求するに及んで、ロンドン市もカンパニーもともにその自治權を増し、その機能を擴大することによつてカンパニーの組織を強化していつた。かくして *livery companies* は國家の機關となつたのである(註三三)。

London livery companies の歴史は、ギルドの變容・再編成の好個の事例である。従つてこれを昔の商人ギルドや當時のクラフト・ギルドと區別する特徴は、エリザベスの治世の初めの姿においては次の如くであつた。すなわち、(1)カンパニーが、“*livery*”または“*clothing*”などとして知られる特別團體(*select bodies*)を有していたこと、(2)國王より直接法人格を取得し、またはそれに相當する認可をうけたこと、および(4)カンパニー自身が“*great companies*”と“*lesser companies*”とに分れ、前者にあつては優先の順位を生じたことなど

である(註三四)。

これ以後の姿において比較することは意味がない。けだし、これ以後カンパニーはギルド制度の生残りとなり、極めて独自の發展を遂げていくからであり、ここにこそギルドとしてよりカンパニーとしての *livery companies* の特殊性があるからである。

註一 Huberman, 前掲三七頁。

註二 Cooke, Corporation, Trust and Company, 1951, p.28.

註三 Cooke, op. cit., p.28.

註四 Davis, op. cit., vol.1, pp. 205, 208.

註五 Ashley, op. cit., vol.1, p.68.

註六 Cooke, op. cit., pp. 31, 30. 奥田秋夫 『ギルド内部の矛盾』政経論叢第七卷二號參照。

註七 Cunningham, The Progress of Capitalism in England, 1916, p.77; Davis, op. cit., vol.1, pp. 208, 209, 234, 235.

註八 藤田敏三 『ギルドの崩壊過程(草稿)』商業及經濟研究第五八冊一〇二頁。Davis, op. cit., vol.1, pp. 206, 207; Cunningham and McArthur, Outlines of English Industrial History, 1920, p.64.

註九 藤田前掲論文一〇一頁以下。

註一〇 Gross, op. cit., vol.1, p.157.

註一一 Jordan, How to Form a Company, 1915, 9th. ed., p.1.

註一二 Gross, op. cit., vol.1, pp. 127-129.

註一三 Gross, op. cit., vol.1, p.139.

註一四 Gross, op. cit., vol.1, pp. 134-138.

註一五 Gross, op. cit., vol.1, p.139.

註一六 Livery companies の中の the fishmongers はエドワード一世の治世に、その權利および義務に關して國王の認可をうけていた。またその他の八つのカンパニーは、エドワード三世から特許狀を受けたものと思われてゐる。Davis, op. cit., vol.1, pp. 209-210.

なお同様のカンパニーが一五世紀 Coventry やその他の地方都市に見出された (Cunningham and McArthur, op. cit, p.64.)

註一七 Davis, op. cit., vol.1, pp. 230, 232.

註一八 Cooke, op. cit., pp. 31-32. 奥田前掲論文三五頁以下。

註一九 Davis, op. cit., vol.1, p.25.

liveryman が破産し、または金錢債務に關する争の協定條件を果しえなかつたときは、liveryman としての地位を失つた。あるいは彼らが慈善基金 (charitable funds) からの援助を申請したときには、名義は別として實質上の地位を失ひ、the livery の加入金が拂戻された (Davis, op. cit., vol. 1, p.215.)。

註二〇 freemen はその所屬するカンパニーによつて取締られた商工業に従事することができたし、また年金、その他の慈善的援助をカンパニーの基金からうけることもできた。さらにカンパニーによつて管理される多くの教育施設の利用も freemen の家族に限られていた。

註二一 特權が取得せられた後の freeman に生まれた嫡出子 (legitimate children) は、男子も女子もすべて出生によつて特權を有した。

註二二 特權は屢々尊敬の徴として地位の高い人に贈られた。たとえばヘンリー七世や皇太子のヘンリー (ジェームズ一世の子息) は merchant tailors であり、ジェームズ一世は clothworker、チャールズ二世やジェームズ二世やウィリアム二世は grocers、ヘリザベス女王は the mercers の “free-sister” であつた。

註二三 Davis, op. cit., vol.1, pp. 213-214.

註二四 Davis, op. cit., vol.1, pp. 216-219.

註二五 たとえば一四一五年には早くも the drapers の成員は商人 (tradesmen) に限られず、一四四五年には the skinners の成員中一人のみが實際に取引を行つてゐたにすぎない。また一五〇二年以降 the Merchant Taylors' Company は特許狀によつての商業に開放され、一八八二年にはカンパニーの livery は主としてこれを専門とする人（すなわち富裕な實業家 (wealthy business men) や引退した商人 (retired merchants) のみから成つてゐたといわれる。

註二六 一六世紀の半ばまでには自國の商人 (tradesmen) や職人 (artisans) あるいは外國人で、ロンドン市の郊外、すなわちカンパニーの管轄外に定住する者が多かつたので、ヘンリー八世の治世に、制定法によつて彼らの仕事は the London Companies の認可と検査に服すべきものとされた。エリザベスやそれに續く時代に賦與せられた幾つかのカンパニーの特許狀では、彼らの權限は明らかに市の境界を二マイルから七マイルまで超えた領域に擴大されてゐた。さらに the Goldsmiths' Company は見本貨検査 (trial of the pyx) の權限を、the Stationers' Company は一八四二年の Copyright Act に基づく全國のすべての出版物の登録權を有することとなつた。

註二七 Davis, op. cit., vol. I, pp. 224-226.

livery companies が參加した最も興味ある植民地化計画は、the Irish Society のそれであつたといわれる。すなわち、一六〇九年にジェームズ一世はロンドン市に、アイルランドのアルスター州の新たな土地に植民し、その地を統治することを懇請した。それは王が、『全能の神の思召しに叶ふ、市にとつて榮譽となり、しかも引受けたる者を益する如き』と表現した計画であつた。そこで直ちに市長は、その提案を検討すべく一二の great livery companies の代表者會議を開催し、その結果、計画を實行に移すために各カンパニー當り五千ポンド、全體で六萬ポンドの拂込がなされた。さらにこれらのカンパニーは、一人の總裁 (governor)、副總裁 (deputy governor) および二十四人の理事 (assistants)、市裁判官 (recorder) から成る植民地の統治機關を提供した。the Irish Society とよばれるこの團體は「一六一三年ジェームズ王によつて、Governor and Assistants of the new Plantation in Ulster, within the realm of Ireland」として設立され、その目的實行のために舊デリー市の跡やその近邊に新たな州が設けられて、Londonderry」と名づけられた。しかしその他の大部は、livery companies の間、一二等の分の地區に分けられ、一地區だけが the Irish Society の管理をうけた。

註二八 Cooke, op. cit., p.32.; Davis, op. cit., vol.1, p.231

註二九 Davis, op. cit., vol.1, pp. 221-222, 228-229, 232.

かような偉大な富の蓄積は、カンパニーの生命を一層強化した。けだし、團體による財産の保有は、理論的には何らかの公的な目的の達成に奉仕するものであるが、その目的が達成若しくは見失われたときには、その財産を、殊にそれが多額である場合には公平に分配することが極めて困難となるので、團體そのものと財産とが結び付く傾向があるからである。

一九世紀の初頭以後、カンパニーの富は急激に増加した。それは主としてカンパニーの所有する多額の市の物的不動産權の價格が急騰したためであつた。すなわち、一八八〇年には信託にて保有される財産からの收入が約二〇萬ポンド、また法人財産からは五五乃至六〇萬ポンド、總額七五萬ポンド乃至は八〇萬ポンドに上ることが認定され、またその財産は少くとも一千五百萬ポンド、他方その債務は約一八萬ポンドと評價された。

註三〇 Davis, op. cit., vol.1, pp. 210-211, 221.

註三一 これらのカンパニーの中、一二のものが、その巨大な富と重要性により、また市の政治に多くの代表を送っていることから“great livery companies”と呼ばれ“lesser”または“minor” livery companies として知られるその他のものと區別されるようになった。さらに前者の間にも優先の順位が確立せられた。

註三二 Davis, op. cit., vol.1, p.210.

註三三 Davis, op. cit., vol.1, pp. 221,231.

註三四 Davis, op. cit., vol.1, p.211.

第四 産業ギルドの Trading Companies への展開

われわれは前章までにおいて、商人ギルドからクラフト・ギルド、そして London livery companies に至るまで

の産業ギルド (Trade Gilds) の生成發展の跡を辿つてきた。それはこの過程が、この後において經濟社會の流れの中に經濟團體の主流として立ち現われる會社企業の萌芽を意味するが故に他ならなかつた。従つてこの段階で、産業ギルドが會社企業の生成にとつて如何なる意義を有するかを改めて検討しなければならないであらう。

一六世紀、それは今までも繰り返して述べてきたように、ギルド制度が没落する世紀であつた。外國市場の擴大と資本や海上貿易という新たな要素の出現は、産業組織を封建制度やギルドの絆から斷ち切つた。かくしてギルドを支える地域社會が、國民社會の中に融合したとき、イングラントにおける産業組織も多くの變更を蒙つたのである (註一)。

しかし、新たな事態に直面した商人達は、古き經驗を活かして大膽にこれに立ち向つた。事實、國內産業に關する經驗から發展せしめられた組織形態 (form of organization) を、イギリスの外國貿易に適用した結果が、いわゆる制規組合 (Regulated Companies) であつたのである (註二)。しかもこうした場合に、イギリスにおける商業の中心地であつたロンドンの活動的な商人達が、新たな經濟活動に無關心である筈はなかつた。莫大な利潤への期待が彼らを刺戟したことは想像に難くない。このようにして livery companies は、あるいは自ら率先して活動し、あるいは冒險資本を提供し、さらには既に確立されていた業務管理の組織形態をも提供したのである。このことを裏書する事實は多く存在する。たとえば、一六、一七および一八世紀に、外國との通商や植民地化に従事したイギリスの大カバンニールは、一般にこの London livery companies を範として設立されてゐた。また制規組合として重要な the Merchant Adventurers のカンパニール、當初は livery companies の中の the Mercers' Company 内に組織された

ものといわれている。その後、前者も別個の組織をもつたが、the Mercers の定めた命令に服し、また一種の貢納をしなければならなかつた。一五二六年まで兩者は、取引の記録について同一帳簿を用い、一六六六年の大火まで the Mercers' Hall が Merchant Adventurers の本據となつた。The Turkey Company や the Levant Company も、the Grocers' Company の分枝であり、やはり一六六六年まで、後者のホールを會議に用ゐたといわれている。さらに高名な the East India Company は、その組織化の際に開催された會議のために the Levant Company の帳簿が用いられた程それと密接な關係をもつていたし、従つてその活動分野と成員關係を部分的に同一にすることによつて the Grocers' Company と極めて密接な關係を有したのである (註二)。

このようにして一六および一七世紀に形成された初期の trading companies にみられる、一人の總裁 (governor) と數人の理事 (associates) から成る管理機關という構成は、ギルド制度から發展せしめられたものであつた (註四)。ギルドの影響はそれのみに止まらない。すなわち、ギルドに本質的な協同關係 (fellowship or brotherhood) はなおこれらのカンパニーにおいても維持されていたし、従つてまたギルドに典型的な規制、すなわち忠實の宣誓の要求や、周期的な宴會の決定、出生や徒弟制度による成員たる地位の取得すら、その特許狀に多く見られるところであつた (註五)。たとえば、東インド會社の社員となることのできる條件は一六一五年に定められ、それに依れば社員の血族または被扶養者に有利であつたし (註六)、その持分 (share) の購入者は、加入に際して長期に亘る宣誓をしなければならず、さらに總會に出席しなかつたり、秩序を亂すような行爲あるときは罰をうけた (註七)。またギルドの中に見られた自治法を制定し、計算書類の保管や監査を行う權限と義務とは、屢々制規組合や初期の Joint Stock

Companies の特許狀に明記せられてゐる (註八)。

勿論、かようなギルドの傳統の影響が、極めて鮮やかに印されたのは、trading companies の初期の歴史においてである。従つて、それは Joint Stock Companies よりも制規組合 (Regulated Companies) に一層明かであつた。けだし、制規組合の目的は、嚴密にいつて、前者よりも商業性に乏しかつたからである。それ故、その影響は取引の方式というより、その組織形態や儀式の面においてであつたといふことができる (註九)。

このようにギルド制度、殊に古きギルドの變容した『カンパニー制』が演じた役割を考慮の外において、イギリスにおける會社企業の生成過程を理解することは困難である。けだし、一面において、このカンパニー制という特殊な商業資本の組織形態を受け繼いでいつたところに、制規組合から Joint Stock Companies さらに株式會社企業へと展開するイギリス的な特異性が生じたからである (註一〇)。ともあれ、イギリスにおいて、會社企業はギルド制度の洗禮をうけた制規組合の活動を通じて發芽し、その形成期に向つてゐる。

註一 Cooke, op. cit., p.36; Davis, op. cit., vol.2, p.63; Gower, Principles of Modern Company Law, 1957, 2nd, ed., p.23.

註二 Davis, op. cit., vol. 2, p.66

註三 Davis, op. cit., vol.1, p.224; Gross, op. cit., vol.1, p.149; Carrus-Wilson, The Origin and Early Development of the Merchant Adventurers' Organization in London as shown in their own Medieval Records, (Economic History Rev., vol.4, 1932-34) p.150 et seq.

註四 Scott, op. cit., vol.1, p.7; Lloyd, The Law Relating to Unincorporated Associations, 1938, p.29; Gower, op. cit., p.26.

註五 Carr, Select Charters of Trading Companies, (Selden Society), 1913, pp. XLIX, 105, 245-247, etc

註六 Carr, op. cit., p. XLIX.

註七 Holdsworth, op. cit., vol.8, p.194.; Scott, op. cit., vol.1, p.4.; vol.2, p.96.

註八 Holdsworth, op. cit., vol.8, p.193.; Carr, op. cit., pp. 9, 10, 34, 72, 102, 103, 113.; Scott, op. cit., vol.1, pp 7, 8.; Gross, op. cit., vol.2, pp. 14, 34, 61, 304.

註九 Holdsworth, op. cit., vol.8, p.194.; Lloyd op. cit., p.33.

註一〇 大塚久雄 株式會社發生史論二三四頁。

〔未完〕